

鏡

八

江苏工业学院图书馆
藏书章

藏

卷八十五

鏡花全集 卷十三 第十三回配本（全二十九卷）

定價二千二百圓

昭和十六年六月三十日 第一刷發行
昭和四十九年十一月五日 第二刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 株式會社 岩 波 書 店
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

月夜車	(明治四十三年三月)……………	一
楊柳歌	(明治四十三年四月)……………	一五
三味線堀	(明治四十三年十月)……………	一二七
色曆	(明治四十三年十月)……………	三〇三
櫛卷	(明治四十三年十一月)……………	三九一
朱日記	(明治四十四年一月)……………	四一五
小春	(明治四十四年一月)……………	四四七
青鷺	(明治四十四年一月)……………	四六九

酸	漿	(明治四十四年一月).....	四七九
露	肆	(明治四十四年二月).....	四九三
築地兩國		(明治四十四年二月).....	五三九
吉原新話		(明治四十四年三月).....	五四一
妖術		(明治四十四年五月).....	六三三
逢ふ夜		(明治四十四年六月).....	六六一
高棧敷		(明治四十四年六月).....	六七二
池の聲		(明治四十四年六月).....	六八九

月
夜
車

宴會と云ふが、優しい心ざしの人たちが、なき母親の追善を營んだ、其の席に列なつて、式も盞も濟んだ、夏の夜の十時過ぎを、袖崎と言ふ、……今年東京の何某大學の國文科を卒業して、故郷へ歸省中の青年が山の麓を川に添つて、下流の方へ車を走らして歸つて來た。やがて町に近い、鈴の緒と云ふ橋が、河原の晁々と白い、水の蒼い、對岸の暗い、川幅を横に切つて、艶艶と一條架る。袂に黒く、こんもりと濃い緑を包んで、遙かに星のやうな遠灯を、ちら／＼と葉裏に透す、一本の榎の姿を、前に斜に見た處で、

「車夫、」

と上から聲を懸けた。

「待つとくれ。」

「へい、」

「其處へ。一寸、右へ入つて貰ひたいな。」

ト車は、急に石碓路に、がた／＼と音を立てて山の裾へ曳込んだが、ものの半町もなしに、直ぐ上り口の、草深い峻い坂に成るのであるから、黙つて居ても其處で留まつた。

「旦那、何うなさります。」

「下せ。」

と云ふ時、袖崎に續いて、背後から並んで來た五六臺の車が、がら／＼と川縁を、町へ差して通過する。看板の薄黄色い灯が、幕を開けた舞臺を走る趣に見えた。

尤も彼の前にも車が續いた。爾時、橋の上をひら／＼肩裾の薄く濃く、月下に入亂れて對岸へ渡つた四五人の影も見えた。其等は徒歩で、些と早めに宴會を辭した連中。初夜過ぎの今頃を如何に夏の川縁でも人通りは絶えてない。人も車も、いづれ列席したもので、……其の前後の車の中から、彼は引外して、此處に入つて來たのである。

氣のいい親仁だつた。車夫は、楫棒を上げたま、捻向いて、

「草場の夜露が酷うございますで、旦那、お袴の裾が濡れませう。乗つていらつしやいませ。ええ、何んでござります、最う彼是然うして待ちますほどの事もござりますまい。お連の方は皆通過して了つたやうでござりますで、大概大丈夫でござりませう。徐々曳出して見ませうで。いや、何うも其の、あれでござりますよ。つい此のお酒と言ひますものが、得て其の素直に内へお

歸りになり憎いものでござりまして、二次會とか何とか申しますんで、えへ、」

と人の好い笑ひ聲。

「あゝ、若い衆何かい、連のものが、何處か二次會へ引張出さうとして、私を中へ引挾んだ、……其れを外したのだと思つたのかい。」

「へい、それ引込め、と仰有りますから、精々目着りませんやうに、突然蠟燭を消して來たでござります。山の蔭に成りますで、車一臺は月夜でも、一寸目には着きますまいと思ひまして、へい。」と云つて、些と間拍子の抜けた、看板をぶらり笠の下へ釣つて見せた。が、地方の事とて、番號もなく茫と白い。

「御深切、御深切、」

と笑つて、

「然うぢやないのだ。まあ下りよう。」

「へい、お待ちなさいまし、石碓で齒が軋みますで。」と蹲つて、ぐい、と楯を壓へる。

其處へ下りた。

「しかし、然う思つたのは道理だよ、同伴が同伴だからね。」

「えゝ、大分、お綺麗な處がお揃ひでござりました、皆新地の御連中。」

「處が、今日の會は眞面目なんだよ。婦人たちはお酌に來たのでもなければ、取巻きでもない、實は施主なんだ。」

「施主、へい、施主と申しますと……」と何かまぶしさうな目を細うして、薄い眉毛を俯向けた、寡た親父が手拭で額を拭く。

「志す佛の追善をしたのさ。藝者たちが感心ぢやないか。」

「お珍らしい、奇特な事でござります。いづれ旦那筋のでござりませう。」

「一寸聞くと誰でも然う思ふだらう、處が違ふんだ、客筋のぢやない。皆の師匠の追善なんだ。」

「お師匠さんと申しますと？」

爲に蠟燭まで消した車夫は、つい通りの乗客ではない、馴染の氣らしく、親しげに問懸ける。

「若い衆、知つてゐるだらう、此の川下の稻荷河原と云ふ、新地の裏に成る。彼處に、——遊廓の女が、遊藝から讀書、茶、花なんぞの授業を受ける女紅場と云ふのがあるのを、」

「ござります、へい、成程。」と早や半ば合點した風をした。

「其處のお師匠さんの十三回忌を営んだのだよ。」

「十三回忌、はあ、大分久しいあとの佛様を、あの徒には猶更奇特な事でござります。」と手拭を握んだ手を、胸に置いて傾いて、

「旦那、くどい事をお尋ね申しますやうでござりますが、あの其の十三回忌の今日の佛様は、旦那衆でござりますが、それとも御婦人で、」

「女だ。何うしたい、と言ひながら、袖崎は尾上の松を仰いだ。山懷に紹が暗く、髮黒く、月影に其の色が白い。」

笠の下から、これを透かして、車夫は其笠を取りながら、思案顔の額を伏せた。

「もし、それぢや、其のお方は、袖崎さんの御新姐ぢやござりませんか。」

「え、知つてゐるかい、若い衆。」と振返つて熟と視た。

「面目もござりません。」と手拭を笠に落して、裏返しに膝へ下げた、腰を屈めて、

「十三回忌の其の佛様は、貴方の御母様でいらつしやいませう。坊ちゃん、前に御厄介になりました友造でござります、最う、お覚えはござりますまい。」

と滅入つた聲して、目のしよぼくした寂しい眉を擡げて言つた。

「まあ、何うした？」

と手にした扇子を、その、傍へ。

「僕は些とも氣がつかなくつた。」

「此の體でござります。へい、御見忘れは御道理で。いや、最うからつきし、意氣地もだらしも

ござりません。貴下は御成人遊ばしましたな。何うも御様子が肖ておいでなさいます、と今申せば申しますやうなものの、餘りおほきくお成りなさいましたで、まるで以て、思掛けずでござりました。失禮ながら、お幾つに。」

「友さん、後厄だよ。」

「へ、誰にお聞き遊ばしたやら、大分高慢な口をお利きに成ます、お廿六で、」

「あ、」

「しみゝ存じて居りますのは、まだ七歳八歳、御親父様も、御存命の時分でござりますから、彼是雜と二十年。其れがお亡くなりなすつて、母様が、女紅場へいらつしやつて、踊やなにか、遊藝の師匠を遊ばして、手一つで、貴下をお育てなさいます時分は、蔭ながらお顔を見ましたく、るるなもの。大い御恩を蒙りましたに、いざお家が、と言ふ頃には、碌に暑寒見舞にも御伺ひたしません。手前が其の不都合な料簡方と、お家の罰で、此の體裁でございます、へい。」

こんな薄汚い、車夫風情をつかまへて、かつたい坊ともお呼びなさらず、

(友さん)と今おつしやつて下さいました、其の御聲が、御新姐様そつくりで、——友造は胸が充滿に成りました。」

袖崎は再び峰を仰いだ。言はれて見れば我ながら、Ⅱ友さんⅡと呼んだ自分の聲が、谷深く鈺

に響いたやうにも思ふ。母親の其の墳墓は、此の山の唯ある丘の、此の月の浅茅生に、影薄く露濃かに寂とある。

友造は鼻をすゝつて、

「えゝ、人間慙うまでに成りませずば、表向き貴下のお供をいたしまして、今夜なんぞ、たとひ對手は藝者でも、御新姐様には齋檀那、施主方の下足番でもしませうものを、早や全く腑甲斐ない、残念な事でござります。」と曲げた腰も立ちあへず、石を噛む齒の根に躓まつた。草も荒れ、地も破れて、樹蔭を洩る月斷々に、骨を碎いて散らしたれば、片輪車の影を倒して、輪廻を凄く描ける其の状。

二

此の可哀な車夫に向つて、大川の流の音の身に沁むやうに、姿を引締めてゐんだ袖崎の帽子には、殊更に月が宿るが如く見えた。

「何も稼業なら可いではないか、天秤棒を擔いだつて桿棒を握つたつて、誰に、何が極りが悪いね。

しかし仕事は何うしたんだね、友さんは手に好い職があるのぢやないか。」と訝しさうに然う言

つた。友造が袖崎の家に恩があると言つたのも他ではない、此の縣に聞えた蒔繪師だつた、彼の父に師とし事へて、友造は一廉腕の出來た職人であつたので。固より以前から、友造の家は、土地でも、場末の、町はづれの、舊の足輕町の破れ長屋に、家族が大勢で、かびた、濕つた、じとじとした貧しい暮しで居たのであるから、自分に店を張つて註文を取るほどの資力はないまでも、同業の許に雇はれて、給金を取らうなら、慫うした力業をするには當らぬ。又其の方が収入も多い筈ではないか。

「え、其れが矢張、手前心から仕方がないのでござりまして、以前、お家に居りました時分から、何うも此の目が悪いので、」

と掌で上へ擦つて、

「此に就けては御親父様、御新造様も大概御心配下すつた事ではござりません。友造や、身體を謹め、友さん、酒をお飲みでないよ、と親身に仰有つて下さります。……貴下の前でござります、我ながら愛想の盡きた不身持でござりまして、毎々男の面目玉が溝瀆の茄子に成らうとする處を、幾度お救を頂いたか分りません。其れにも懲りず、一時なんぞは、頓と遊蕩の金子に困ります處から、最う目が見えぬ、へゝゝゝ」と情ない聲を出して、

「言はうやうもござりません。もう、最う目が見えぬ、一生の大難でござりますと、御新姐様を

お拜み申して、此の二十里先の大巖の不動様と申すのへ、お籠りの願掛けに参りたい、と泣いて見せて、最う其れまでも毎々の、逆も御利生のない處を、御新姐様のお執成で、些と纏まつた草鞋錢を頂戴する、と其の足で新地入りでござります。何處へ罰が當りませう。達者な目でも盲目に成らずには済まぬ筈を、其の上にもお詫を叶へて下さいました。御兩親の御利益で、まだ、まあ慙うやつて大まかな處は、雲と霞と、見分けの着きまするのが、目つけものでござります。へい、陰徳は何んとやら、と御酒の上では、能く御親父様がお話しになりましたが、世の中の事と申しますものは、書物の通りには参りませんで。……お慈悲深いお方だけに、お貯蓄と言つてはござりませんで、……お亡なりなされますと、直ぐに御新姐様が、貴下と、お年寄を抱へて、お一人で御辛勞をなさりました。

女紅場で、お師匠さんをなさります、其のお心の中を存じながら、勿體ない、引張りの地獄宿で、鮎の脚を嚙りながら、袖崎の御新姐が直傳だ、と紀伊國は音無瀬川の狐が惡いた人畜が、沙汰の限りでござります。

え、坊ちゃん、こんな世迷言を申しまして、今更貴下に、お詫を願つて、又お目に懸りたいの何うのと申します、然うした料簡ではござりませんが、それでも貴下の母様の何回忌ぐらるは心に覺えて居ります處へ、餘り思懸けないお方にお目通をいたしましたで、つい、其處に、御新

姐様が目の前へお立ち遊ばしたやうに見えましたものでござりますから、豫て胸充滿の申譯をこうかうか喋舌つたでござります。」

と言が途絶えた、咳をして、

「や、而して、お宿は何方においでなさります。」

「あゝ、明日でも話しに來ないか、私はね、針屋に居るよ、知つてるだらう、祖母さんの實家で、再従兄妹の内さ。」

「道理こそ、私を雇つてくれました若い衆が、小菰小路まで、と申しました。いえ、彼處に供待ちをしました、あの徒は皆遊廓のでござりますで、看板がどれも新地組合、印が麗々と書いてござります。姉さんたちが心着けたでござりませう。貴下をお送り申しますのに、町中を新地組合の看板では、御外聞に係はらうと云ふ、……其處で此の橋向うを、あぶれてぶらついて居ります、私が、お見出しに預りましたものと見えます、へい、へい。」と叩頭馴れて、生れついて車夫らしいのも、目の薄いのが物寂しい。

「はあ、御串戯をなさりますな、貴下からお酒錢なんぞ、何うして最う餘分な御祝儀を姐さんたちに頂いて居ります。格別氣をつけてお供申せと言ふ事で。へい、是も全くもちまして今日の御新姐様がお恵みでござります。なかゝ、まだこれでも坊ちゃんさへ御承知下されば、車を此處

へ打棄つて、猿抱負に負ひ申して、友造が禪の紐へ通した天保錢で、風車を買つてお持たせ申したうござります。や、然う言へば、今夜は遊廓前の毘沙門様のお裏祭禮。あれ、お聞きなさりまし、どんどろ／＼と、刻んだ太鼓が聞えます。」

と眩しさうに仰向いた。月は時に川浪の上に打傾き、左右に薄雲の手を伸べては、思ふまゝに光を投げ、水を碎いて、十日の影が澄渡る。……空を劃つた峰の姿は、此の山懷へ暗く成つて、峯の樹立の黒い中に、折から晃々と星が輝く。

友造の影は石碓の上に揺いで、

「あゝ、最う大分遅うござります。さあ、お召しなさりまし。御存じの、あの目の赤い大蜈蚣の紆つた、下り藤の揃ひの軒提灯を御覧じながら、徐々にお歸りなさいませんか。」と話に紛れて、友造は、こゝに自分たちが不意にめぐり逢うとして、其れがために同伴の中から車をはづして引込んだものと思つて了つたらしい。

此方も、又墓から草鞋穿で出て來たやうな古い男に逢つたので、忘れるともなく紛れたが、祭禮の太鼓と云ふにつけて、夢見る耳に、一撥、どろ／＼と入つたやうに、目覺むるばかり思出した。

こゝに待合はす婦がある。